

【ヤクザの溺愛SEX】椿が落ちる夜

「一生離さない」と誓った獅堂の熱い猛毒に、人生を授け溶かされる甘重の夜

サンプル（一部抜粋）

「…はあ。」

世界の音を消すようにザアザアと激しい雨が降り続く。

私はそのゴミ置き場で、傘もなくただ立っていた。

散らばるゴミ置き場で立ち尽くすのは、人生が終わったから。

お金がかかるから、目ざわりだからという理由で親に捨てられた。

「いつその事…誰か殺してくれないかな。」

無情な雨を降らす空を見上げ、ぼそっと呟いた。

「君、どうしたの？」

突然声が聞こえてビクッと身体が震えた。

男性は私の手首を掴んだ。

「女は男には勝てねーんだからさあ、ニコニコ愛嬌ふりまいとけよ。」

掴まれた手首を汚いビルの外壁へと押し付けられた。

ぶちゅつと強引にキスをされ、服の中に手を入れられる。

抵抗しない方が……ずっと楽。

壊れそうな自分を守るのは『無』の鎧だけだった。

でもその瞬間、男性の手が私のジャージからすつと無くなった。

少し驚いて目を開けて前を見ると、男性は首根っこを大柄の男性に捕まえられていた。

私より三十センチほど背の高い、ガタイのいい強面の男性……。

右目には縦に大きな傷の跡があった。

「女に絡んでる暇があるなら、ちゃんと金を返せ。

逃げられると思ったのか？俺から。」

強面の男性はチャライ男性の胸ぐらを掴んで詰め寄っていた。

「おい」

上から太く低い声が聞こえて慌てて顔を上げると、獅堂と呼ばれていた男性が私に話しかけていた。

「こんなゴミ置き場で傘もささず、突っ立って何をしている？」

冷たい言葉なのに、どこか暖かさを感じた。

「拾ってやる。ついてこい。」

肩にかけられたジャケットは驚くほど重く、雨の匂いをかき消すようなタバコと白檀の香りが鼻をくすぐった。

（中略）

長い長い廊下を歩き、もわっと湿気の香りがするお風呂場へと連れてこられた。

「洗ってやる。」

獅堂さんは短い言葉だけを口にして、慣れた手つきで私の濡れたシャツを脱がせた。温まったシャワーを足元からゆっくりとかけられる…

「…唇を噛むな。我慢しなくていい。」

太い指で歯をそっと押さえつけられる。

口内に滑り込んできた指は微かにタバコの香りがして、驚くほど熱い。

乳首を撫でていた指がゆっくりと下へ落ちていき、あつという間にクリトリスを捉えられた。

「…椿。初めてか？」

「はい…」

「…そうか。」

獅堂さんは小さくそう言うと、クリトリスを優しくさすり始めた。

「あ…あ…や…ん…」

強引なのに優しい刺激で、身体の奥がぎゅっと熱くなった。

「…大丈夫だ。俺にしがみついてろ。」

言葉は多くないのに、一つ一つが重くて…私はぎゅつとしがみつくように抱きついた。

(中略)

そうして連れてこられた寝室には布団が一組だけ敷かれていた。

「…」

「入れ。」

獅堂さんは布団に寝転んで、そつと掛け布団を持ち上げ私を誘った。

「…はい…」

頑張らなきゃ…何度も深呼吸をして、彼の隣に寝転んだ。

獅堂さんは軽く私の頭を持ち上げて、腕枕をしてくれ…

そのままぎゅつと強く抱きしめられた。

「…椿。ここは安全だから。」

(中略)

翌朝髪を撫でられている感覚がして目を覚ますと、獅堂さんの顔がすぐ傍にあった。

「…起きたか。」

優しい声…優しい手…

私はそつと獅堂さんの手を握って

「…おはようございます。」

と小さく挨拶をした。

「おはよう。」

短い返事。

そつと頬を撫でられ…右目の傷痕が少し緩むように優しい目つきになった。

「…どうして…」

「ん？」

「どうして…昨日、シなかったんですか。」

大切にしてきているような手に安心してしまうのが怖かった。

そんな価値がないのに。出会ったばかりなのに。

だから理由を知りたかった。

「…襲われたかったのか？」

ふつと軽く笑った獅堂さんの目尻の皺が優しかった。

「…えつと…」

「…ん？」

「…しなきゃ…追い出されると思っ…」

目をそらして本音を口にした。

「…安心しろ。追い出したりはしない。

椿が自分から俺を求めない限りは最後までではシない。

そのくらの理性は持ち合わせている。」

「まあただ…椿が早くその気になるようにはするがな。」

(中略)

「ん、ん…」

ただのキスなのに、頭がぼーつとするほど気持ちよくて声が漏れた。

粘膜が溶けていくような熱い舌…獅堂さんは強引にシャツを捲し上げ、乳首をじゅるつと音を立てて舐め始めた。

「ああ…あ、や…ああ…」

じゅるりと熱い舌が這うたびにお腹の奥がぎゅうつと熱く、甘く痺れる。

「…お仕置きだな。」

獅堂さんは短くそう呟いて、私の太ももにキスをした。

そうしてついに到達した獅堂さんの唇は…じゅるりと音を立てて私のクリトリスを吸った。

「ひあつ、ああ…」

途端に全身に駆け巡る甘い電流のような刺激。

(中略)

だけどその瞬間、部屋のドアがノックされた。

「残念だが時間だ。続きはまた夜な。」

獅堂さんはドアの方に返事をし、私からさつと指を抜いた。

(中略)

ドアを開けた瞬間の彼は、冷徹な組織の頭としての刺すような空気を纏っていた。けれど私を見つけた瞬間に、その鋭さが嘘のように解けていくのを空気で感じとった。

「…寂しかったのか。」

獅堂さんの声に静かに頷く。

獅堂さんは私の骨がきしむほど強く、ぎゅつと抱きしめてくれた。

「…全てを知ってもそう言ってくれると良いんだがな。」

獅堂さんは私をさつと抱きかかえ、布団に優しくおろした。

「…一人の時間、何をしていた？」

「…獅堂さんの事…考えてました…」

正直に素直に答えると、ほんの少しだけ獅堂さんの瞳が見開いた。

目尻を下げて獅堂さんが微笑んだ。

「…安心しろ。一生離さねーから。」

あつという間に服を捲し上げられる。

獅堂さんの吐息が朝よりもずつと熱かった。

「朝からよく我慢したな。」

獅堂さんは優しくそう眩くと、ぐちゅつと音を鳴らして中に指を入れた。

「あああつ、あ…や…」

「…好きに汚していいから。」

獅堂さんはそう言うと言うと激しく中をグチュグチュ鳴らしながら抉り…じゅるつとクリトリスを吸った。

「イっ、あああつ~~~~~♡♡」

ブシャッと激しい水の音と共に身体がガクガクと激しく痙攣した。

(中略)

「…イれてほしいって事か？」

そう聞かれて…私は静かに頷いた。

「…俺ももう限界だったんだ。」

獅堂さんの瞳の奥が妖しく黒く光った。

月の光に照らされる彼の入れ墨が…幻想的であまりにも綺麗だった。

「…痛いだろうが…我慢してくれ。」

亀頭でグチュグチュと入口を馴染ませ…ゆつくりと獅堂さんのモノがミシミシと入って来た。

「…大丈夫、です…」

泣きそうになるほど痛くて熱かった。でも隙間なく埋め尽くされていく感覚は…確かに幸福だった。

「…優しくできねーや。」

「…いいか。よく覚えてろ。俺はお前が好きだ。」

「お前以外の女には興味なんてねーんだよ。」

俺の好きな女を傷つけるヤツは、椿自身であつても許さない。

分かったか。二度とゴミなんて言うんじゃないぞ。」

私よりも私を大切にしてくれる獅堂さんに誓うように、私は頷いた。

「…それでいい。」

月夜に照らされる彼の右目の傷痕が、優しく輝いた。

その瞬間に獅堂さんのモノが奥に到達して

「あ…あ…」

電流を流されたような刺激が全身に流れて、頭が真っ白になった。

（中略）

獅堂さんはそつと指で私の涙を拭った。

「泣かせるつもりはなかったんだけどな。」
少し困った顔でそう言っていた。

「これは…幸せで…」

「幸せ？」

「獅堂さんに満たされるのが嬉しい…」

小さく本音を口にする、もう一度中で獅堂さんのモノがぐつと硬くなるのを感じた。

「…あっ…」

「……煽るな。」

全部可愛い過ぎて、こっちの身が持たんな…」

「…もう一回シますか…？」

「…」

（全容は製品版にて）